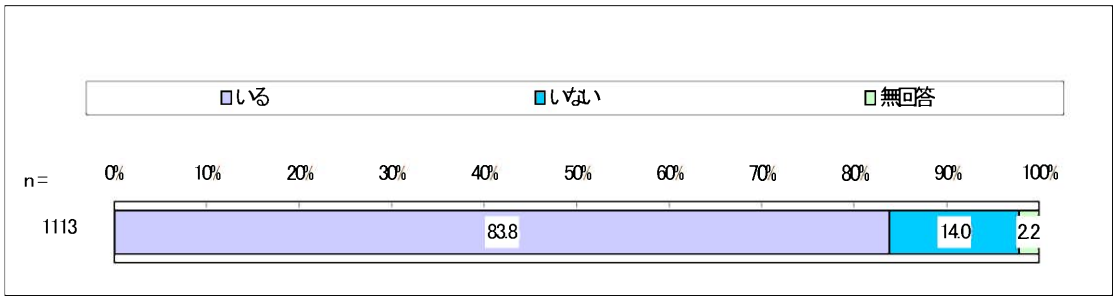
②　悩みや相談事を話せる人・機関

ア　悩みや相談事を話せる人の有無

子ども全体では、83.8%の子どもが、安心して自分の悩みを話せるおとなが 1 人はあると回答している。「いない」という回答は 14.0%であった。

Ｑ８　あなたには、安心して自分の気持ちや悩みを話せるおとなが少なくとも一人はいますか

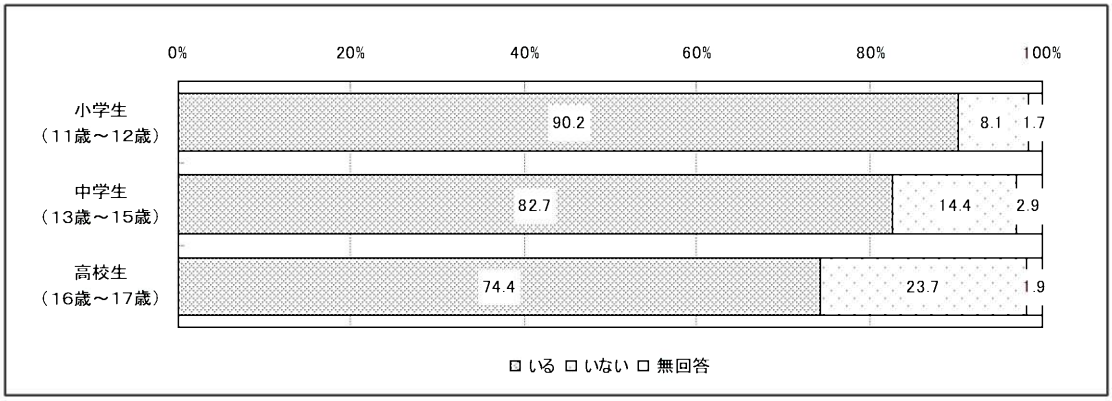
図５３　【子ども―全体】



【子ども―年齢別】

年齢別にみると、小学生世代では 90.2%が「いる」と回答しているが、中学生世代で 82.7%、高校生世代で 74.4%と年齢があがるにしたがって「いる」と回答する割合が減少している。高校生世代では「いない」と回答する割合が 23.7%あった。

図５４



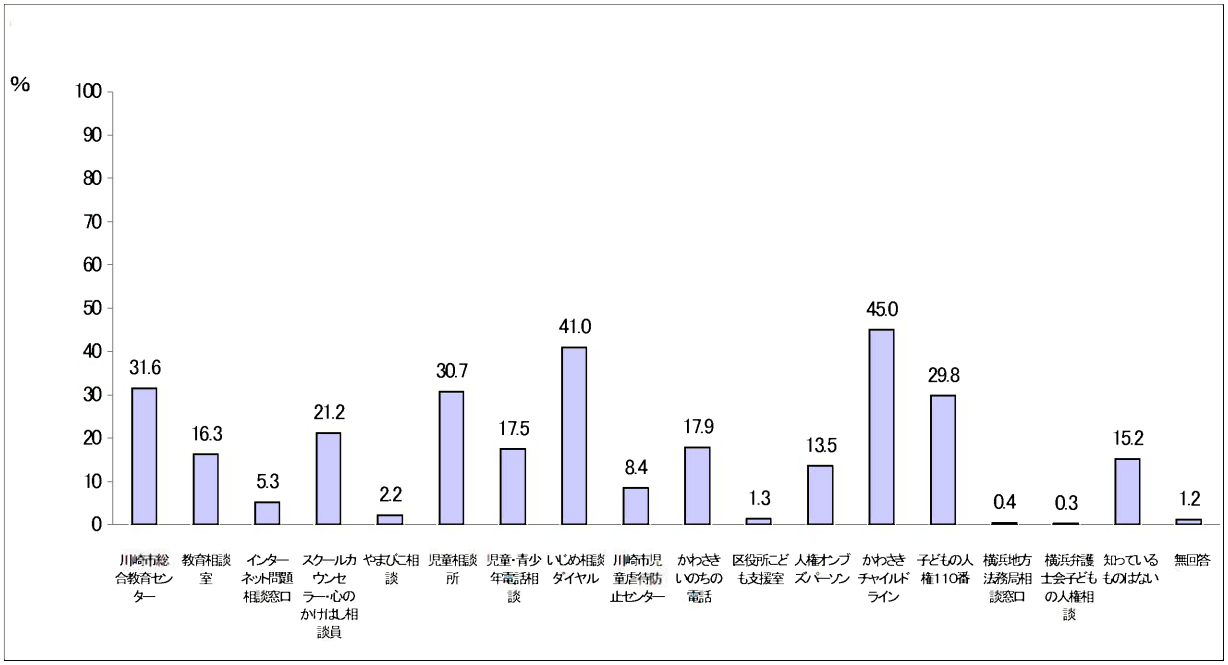
※小学生（n=459）、中学生（n=381）、高校生（n=270）

イ　相談・救済機関の認知度

子ども全体の回答として、最も高い回答は「かわさきチャイルドライン」の 45.0%であった。次いで、「いじめ相談ダイヤル」41.0%、「川崎市総合教育センター」31.6%、「児童相談所」30.7%、「子どもの人権 110 番」29.8%、「スクールカウンセラー・心のかけはし相談員」21.2%とつづく。

Ｑ１０　川崎市の子どもの相談を受けてくれるところで知っているもの

図５５　【子ども―全体】



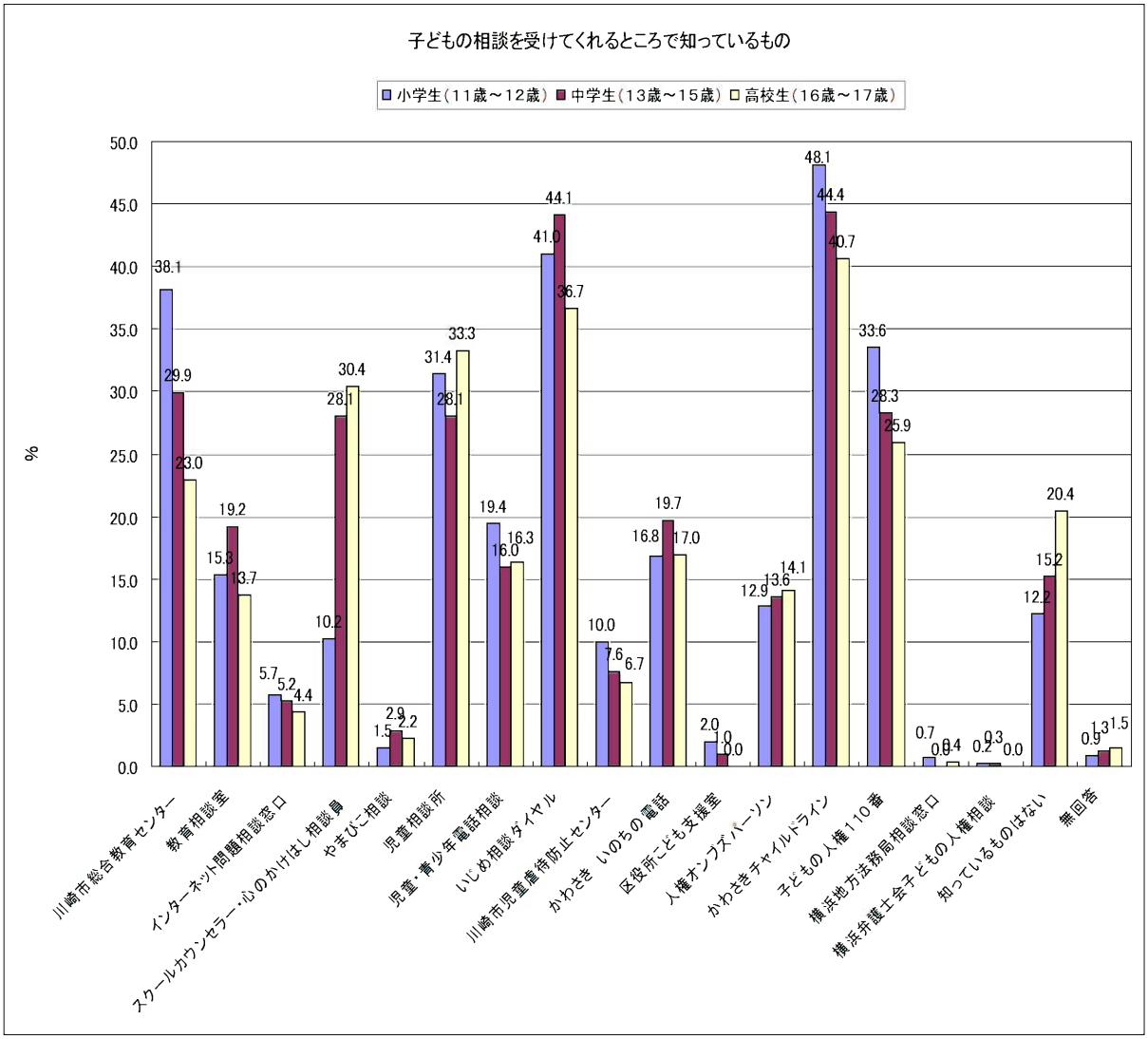
【子ども―年齢別】

年齢別に見ると、小学生世代の「かわさきチャイルドライン」認知度がほぼ半数の 48.1%と高い。

「スクールカウンセラー・心のかけはし相談員」の認知度が中学生世代（28.1%）・高校生世代（30.4%）に比べて小学生世代で低いのは、川崎市内の中学校ではスクールカウンセラーが全中学校に配置されているのに対して、小学校では「心のかけはし相談員」の配置が各区内で数校ずつという状況によるものと思われる。

年齢が高くなるにつれ、「知っているものはない」という割合が高くなり、高校生世代で 20.4%であった。

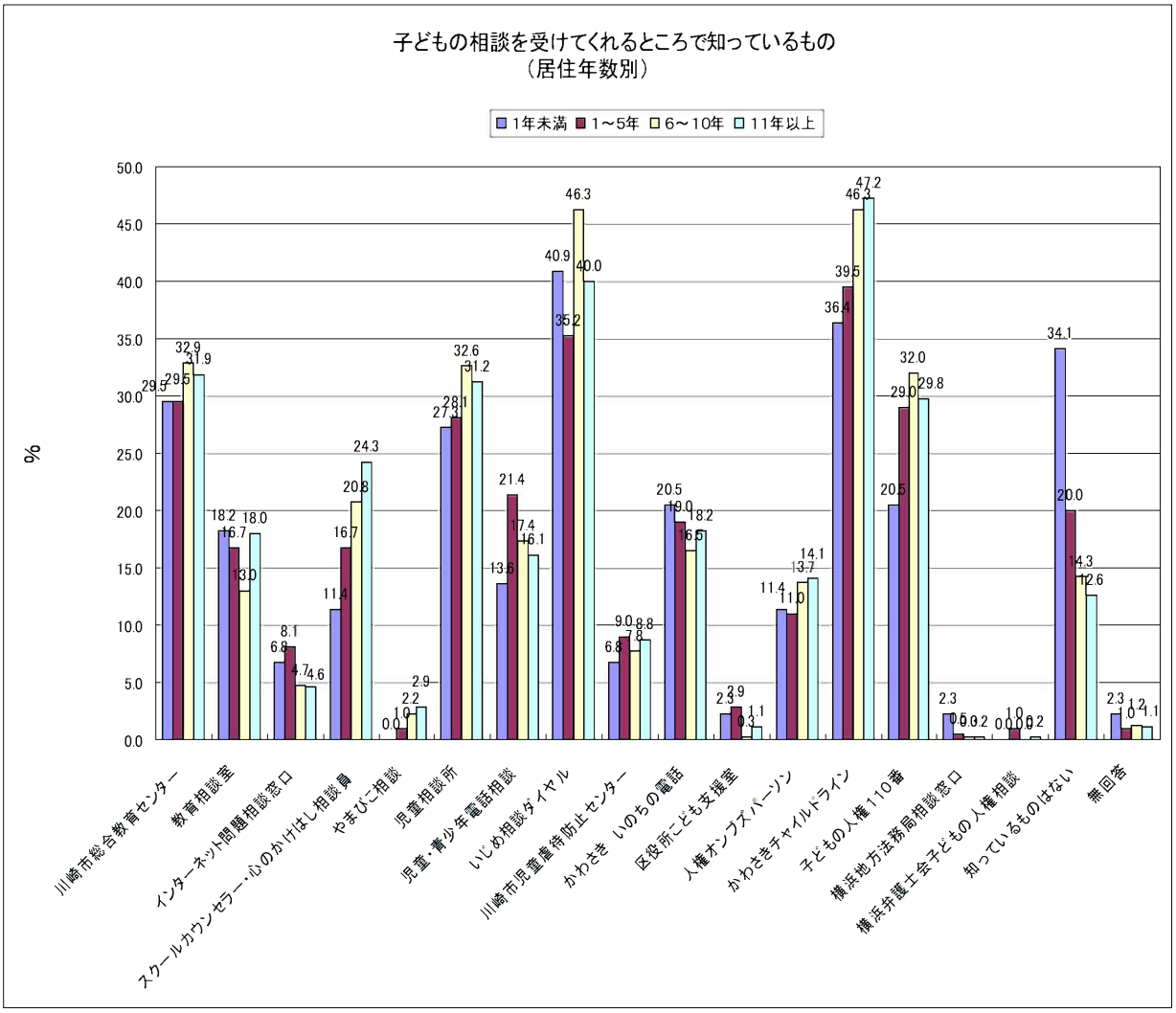
図５６



【子ども―居住年数別】

子ども全体で回答の多かった「かわさきチャイルドライン」「川崎市総合教育センター」「児童相談所」「子どもの人権 110 番」「スクールカウンセラー・心のかけはし相談員」については、居住年数の長い子どもの方が、居住年数の短い子どもよりも認知度が高い傾向にあった。また、居住年数１年未満の子どもは、それ以上の居住年数の子どもよりも「知っているものはない」という回答が高かった（34.1%）。

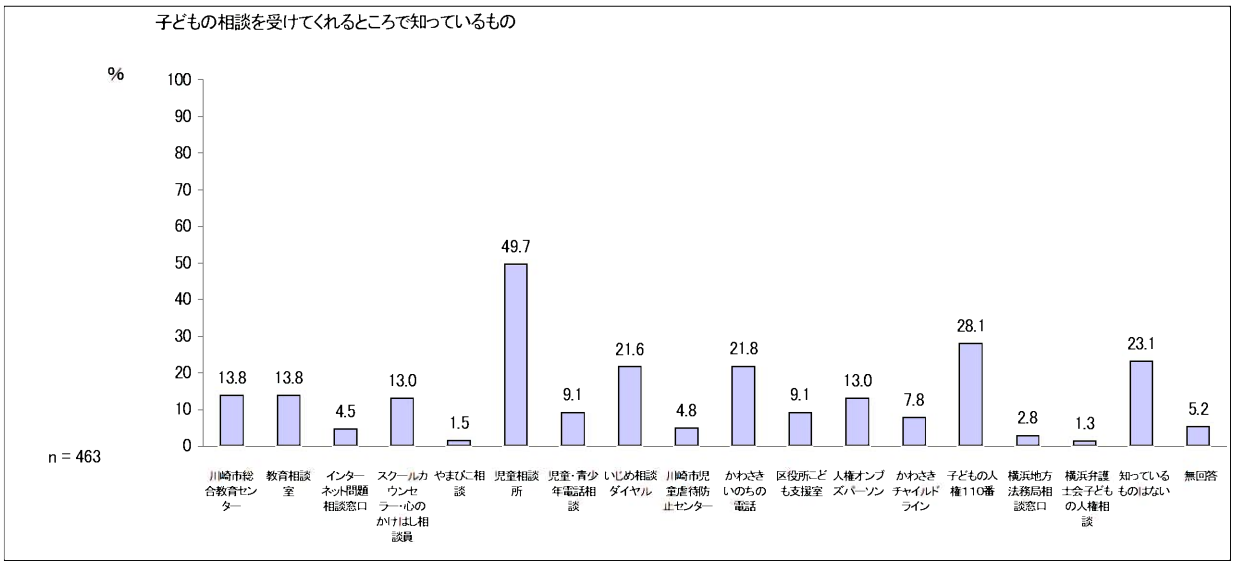
図５７



【おとな―全体】

相談・救済機関について、おとなの認知度がもっとも高かったのが「児童相談所」の 49.7%であった。次に「子どもの人権 110 番」28.1%、「かわさきいのちの電話」21.8%、「いじめ相談ダイヤル」21.6%とつづく。「知っているものはない」という回答は 23.1%であった。

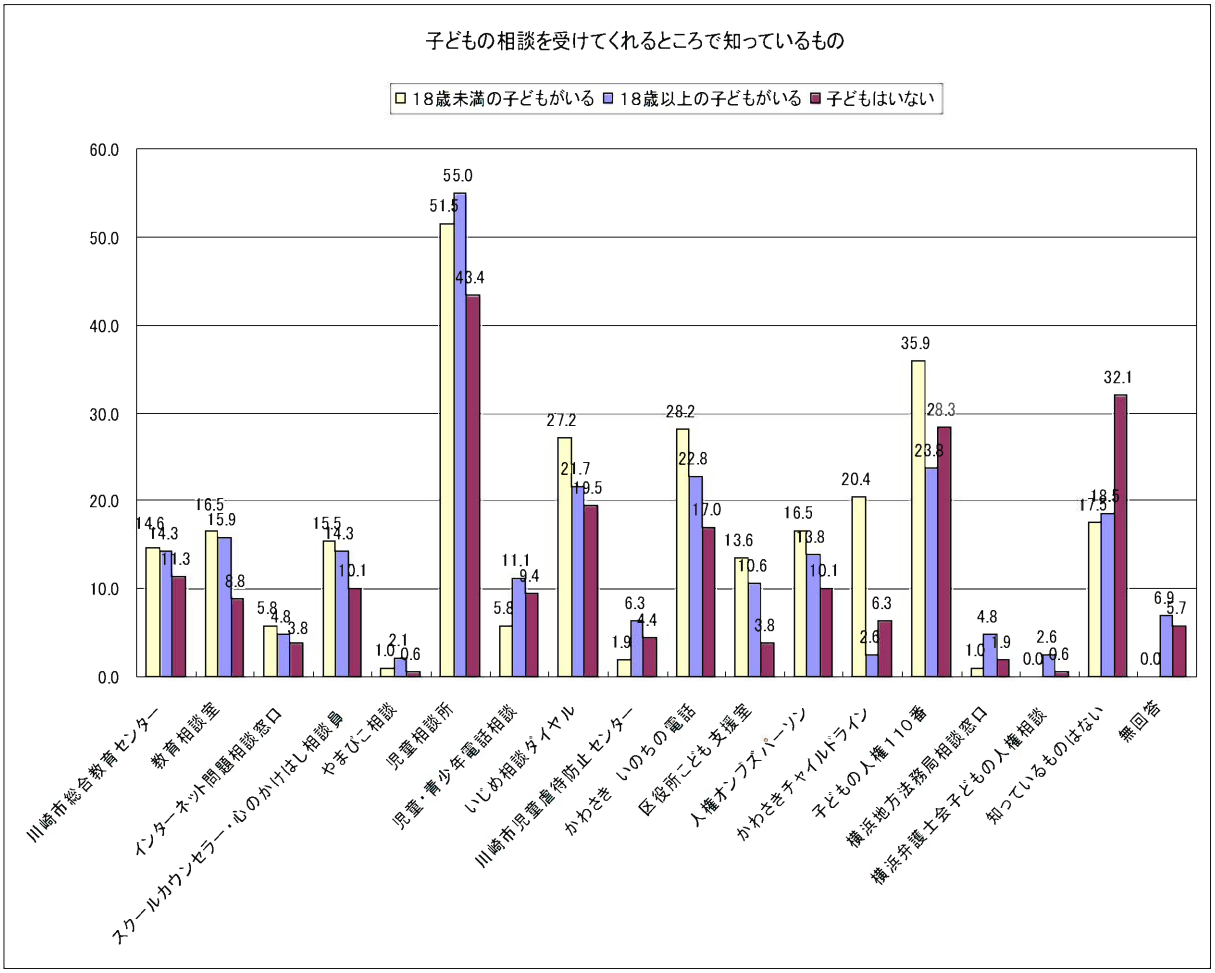
図５８



【おとな―子どもの有無別】

子どもの有無別にみると、以下のような結果であった。

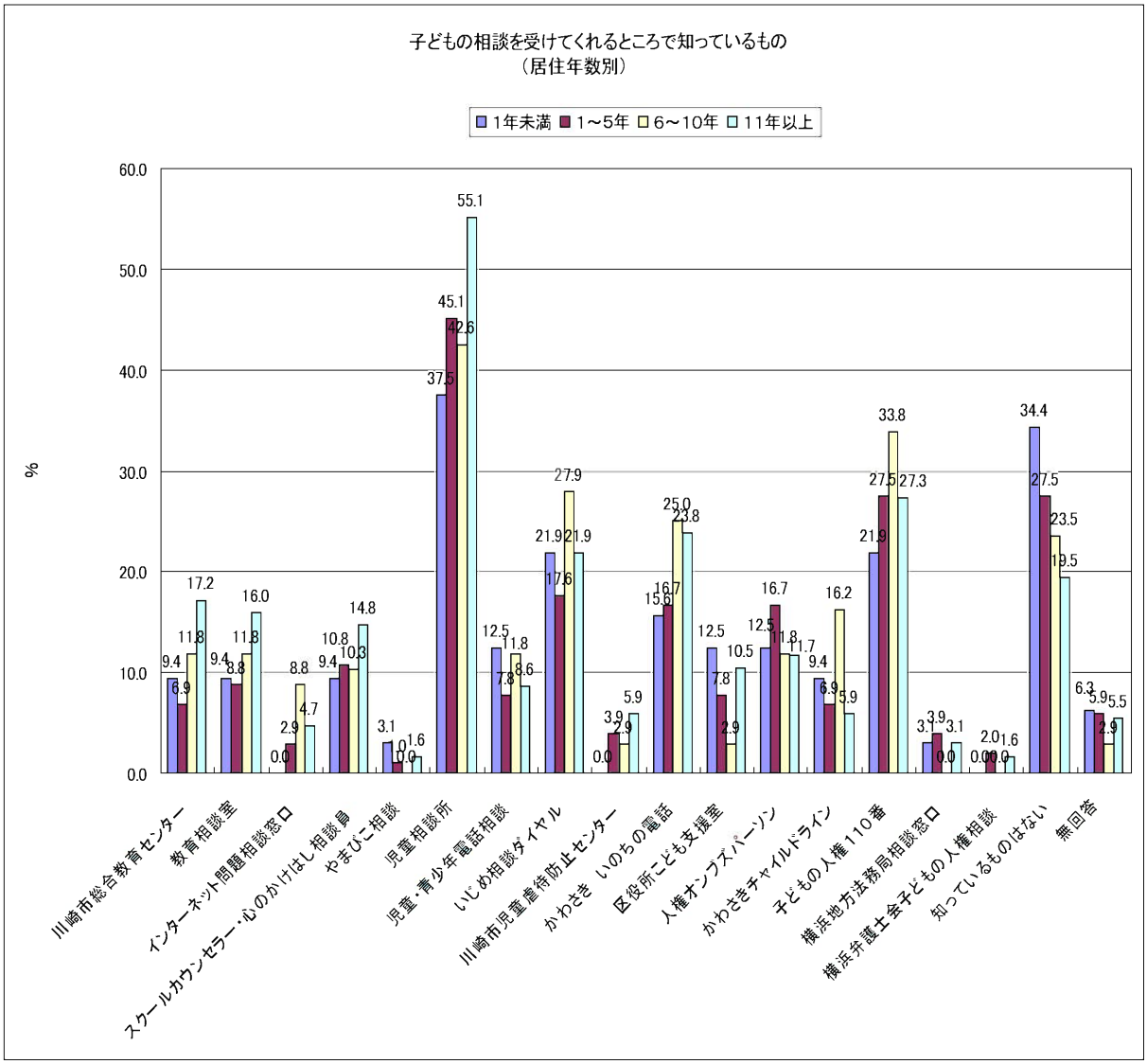
図５９



【おとな—居住年数別】

おとな全体で回答の多かった「児童相談所」「子どもの人権 110 番」「かわさきいのちの電話」は、居住年数の長いおとなの方が、居住年数の短いおとなよりも認知度が高い傾向にあった。また、居住年数１年未満のおとなは、それ以上の居住年数のおとなよりも「知っているものはない」という回答が高かった（34.4%）。

図６０

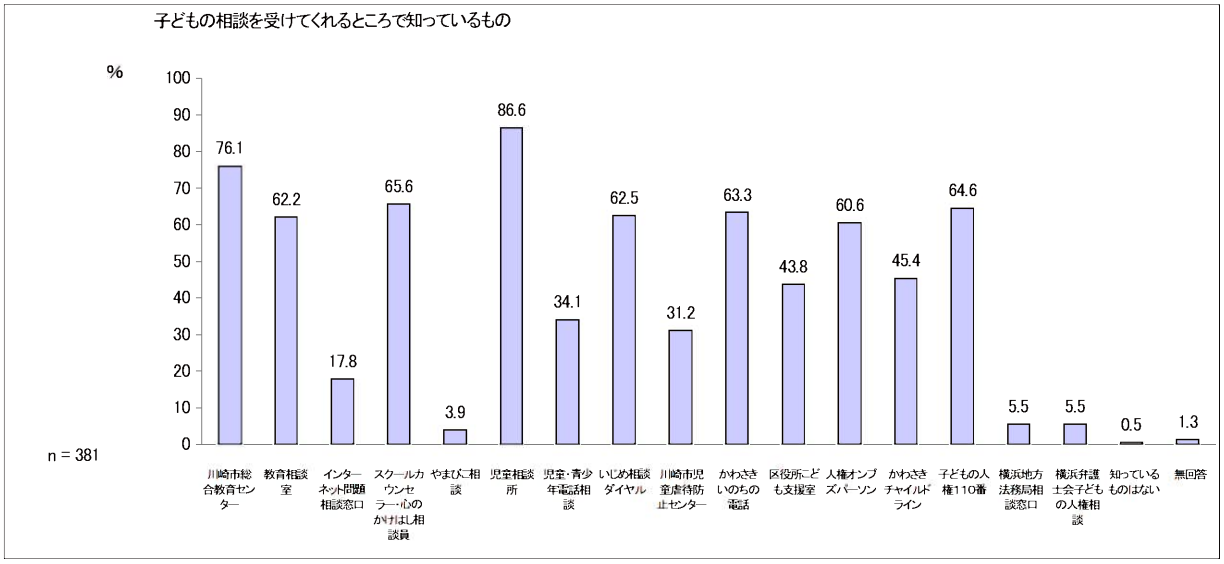


【職員】

相談・救済機関についての職員の認知度は、当然のことながら「子ども」「おとな」にくらべて高い。最も高い回答は「児童相談所」86.6%（学校関係 83.0%、施設関係 93.7%）で、全体の回答が 50%を超えたものは、「川崎市総合教育センター」76.1%（学校関係 82.6%、施設関係 62.7%）「スクールカウンセラー・心のかけはし相談員」65.6%（学校関係 73.5%、施設関係 50.0%）、「子どもの人権 110 番」64.6%（学校関係 66.0%、施設関係 61.1%）、「かわさきいのちの電話」63.3%（学校関係 59.7%、施設関係 69.8%）、「いじめ相談ダイヤル」62.5%（学校関係 68.8%、施設関係 50.0%）、「教育相談室」62.2%（学校関係 69.2%、施設関係 48.4%）、「人権オンブズパーソン」60.6%（学校関係 56.5%、施設関係 69.0%）であった。

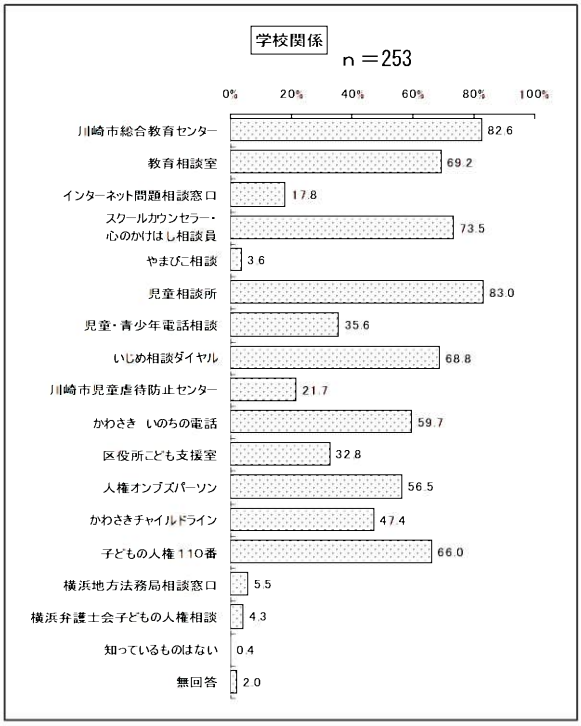
学校・施設別に職員の回答をみると、「児童相談所」「かわさきいのちの電話」「人権オンブズパーソン」は施設関係の職員の認知度の方が高く、「川崎市総合教育センター」「スクールカウンセラー、心のかけはし相談員」「いじめ相談ダイヤル」「教育相談室」は逆に学校関係の職員の認知度の方が高かった。

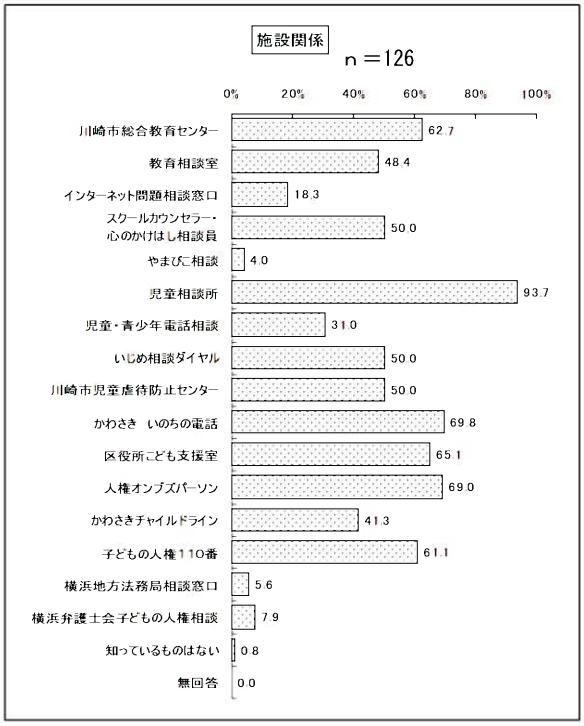
図６１



Ｑ１３子どもの相談を受けてくれるところで知っているもの

図６２

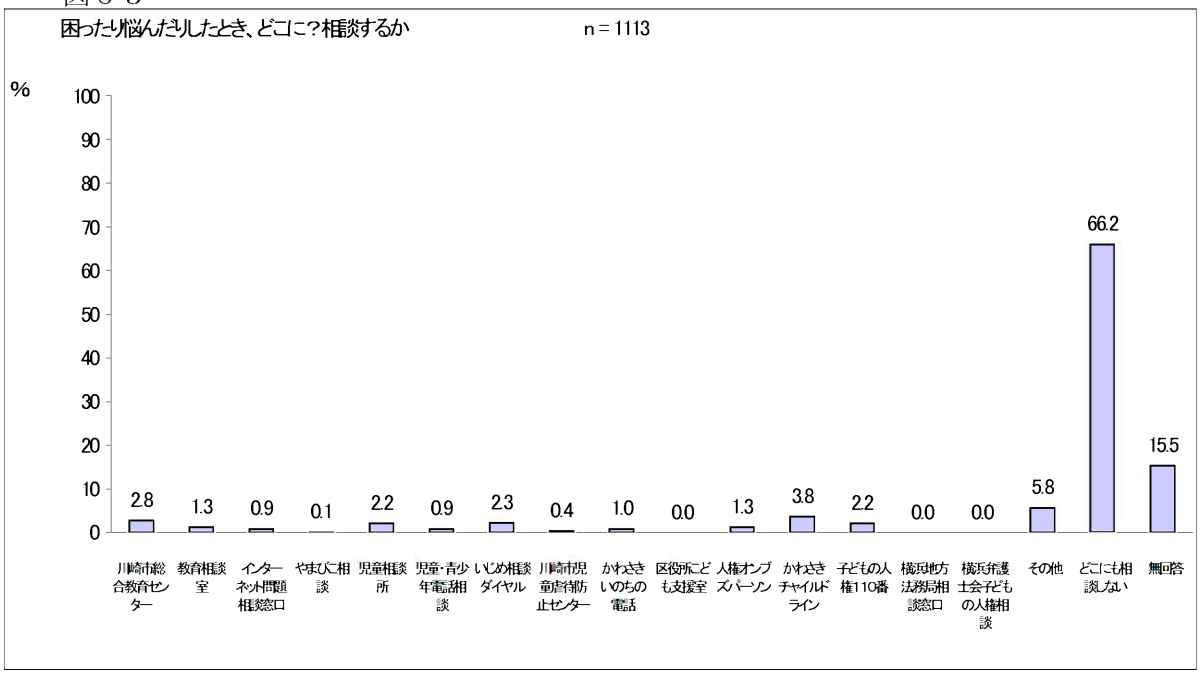




ウ　利用しようと思う相談機関・救済制度

川崎市内で利用できる相談機関や救済制度の中で「困ったり悩んだりしたとき、どこに相談するか」という問いに対しては、「どこにも相談しない」という回答が 66.2%と最も高い結果であった。選択肢の中で最も高かったのは「かわさきチャイルドライン」の 3.8%であった。

図６３

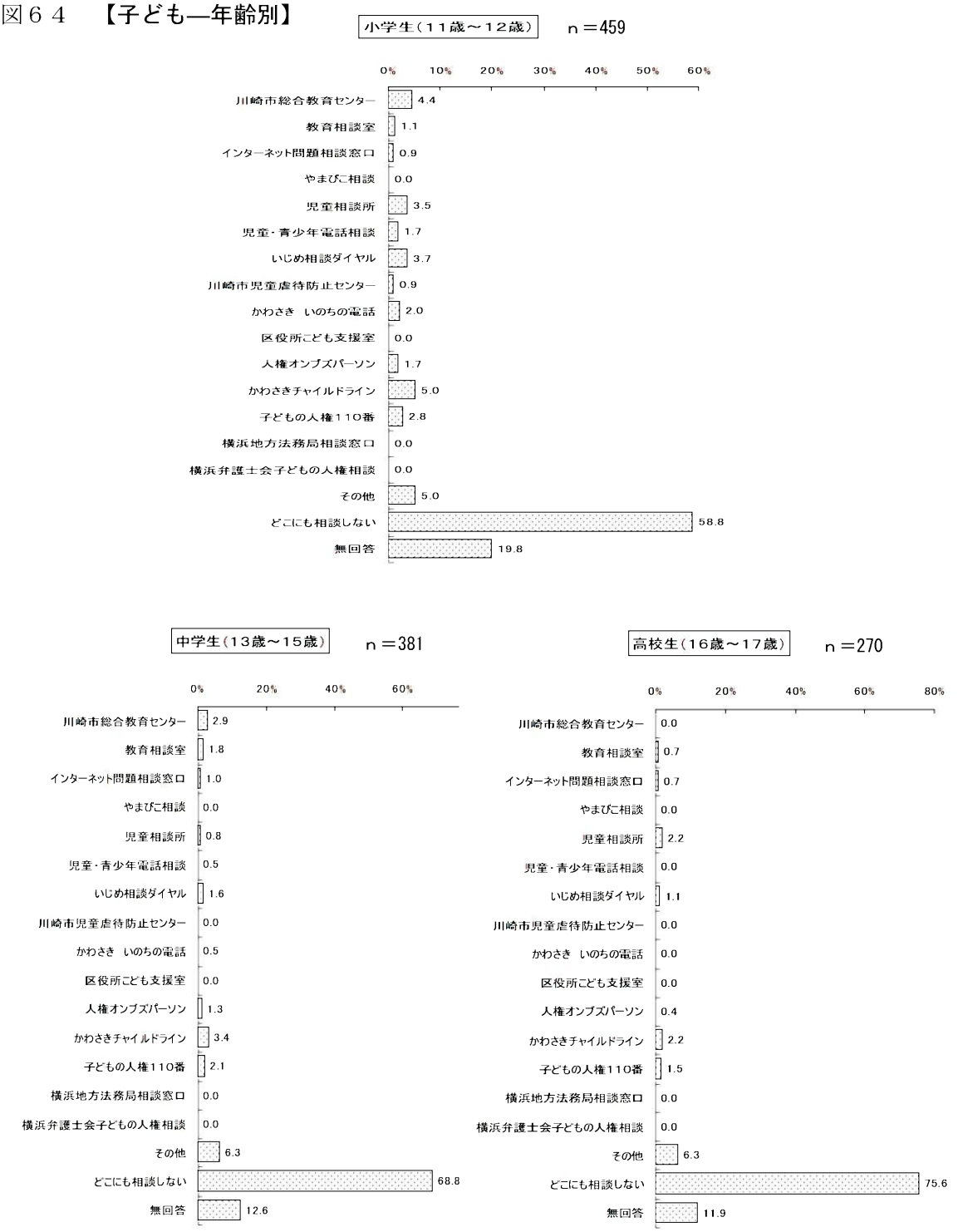


【子ども―年齢別】

年齢別に見ると、小学生世代から高校生世代へと年齢が上がるにつれて「どこにも相談しない」という回答が高くなる（小学生 58.8%→中学生 68.8%→高校生 75.6%）。選択肢の中で最も回答があった「かわさきチャイルドライン」の回答数が低くなっていく（小学生 5.0%→中学生 3.4%→高校生 2.2%）ことからも、同様の傾向が見られる。

Ｑ１１　困ったり悩んだりしたとき、どこに？相談しますか

図６４　【子ども―年齢別】



【おとな】

おとな全体で最も多かった回答は「児童相談所」の 16.6%であり、「どこにも相談しない」は 35.2%であった。ただし、子どもの有無別に見ると、「18 歳未満の子どもがいる」おとなの回答は「児童相談所」で 5.8%にとどまり、逆に「どこにも相談しない」は 43.7%という回答の違いがあった。

Ｑ１７　あなたは、子どものことで困ったり悩んだりしたとき、どこに？相談しますか

図６５　【おとな―全体】

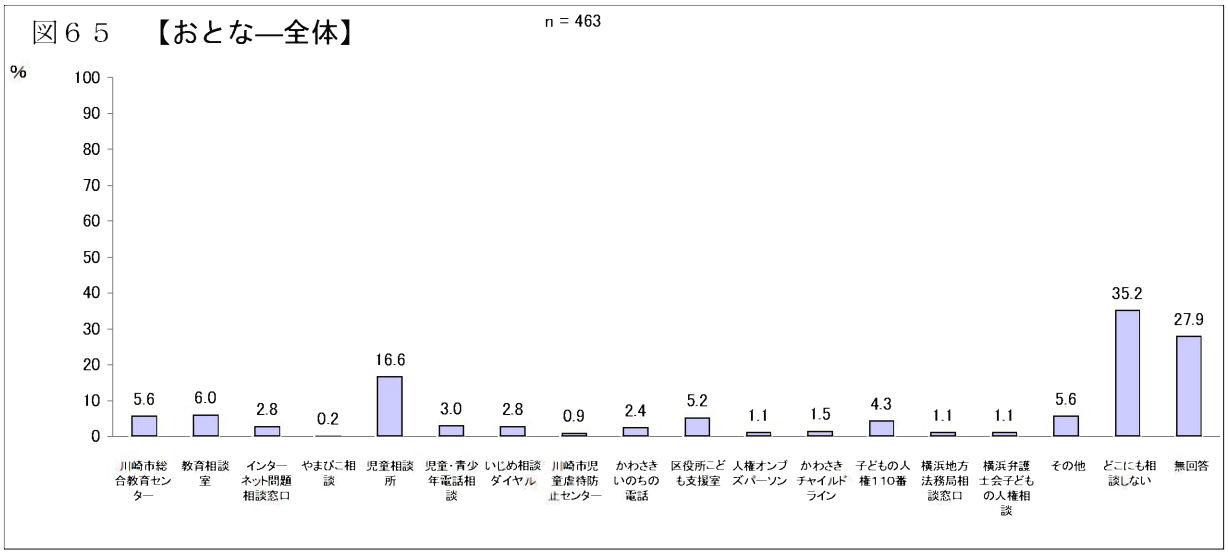
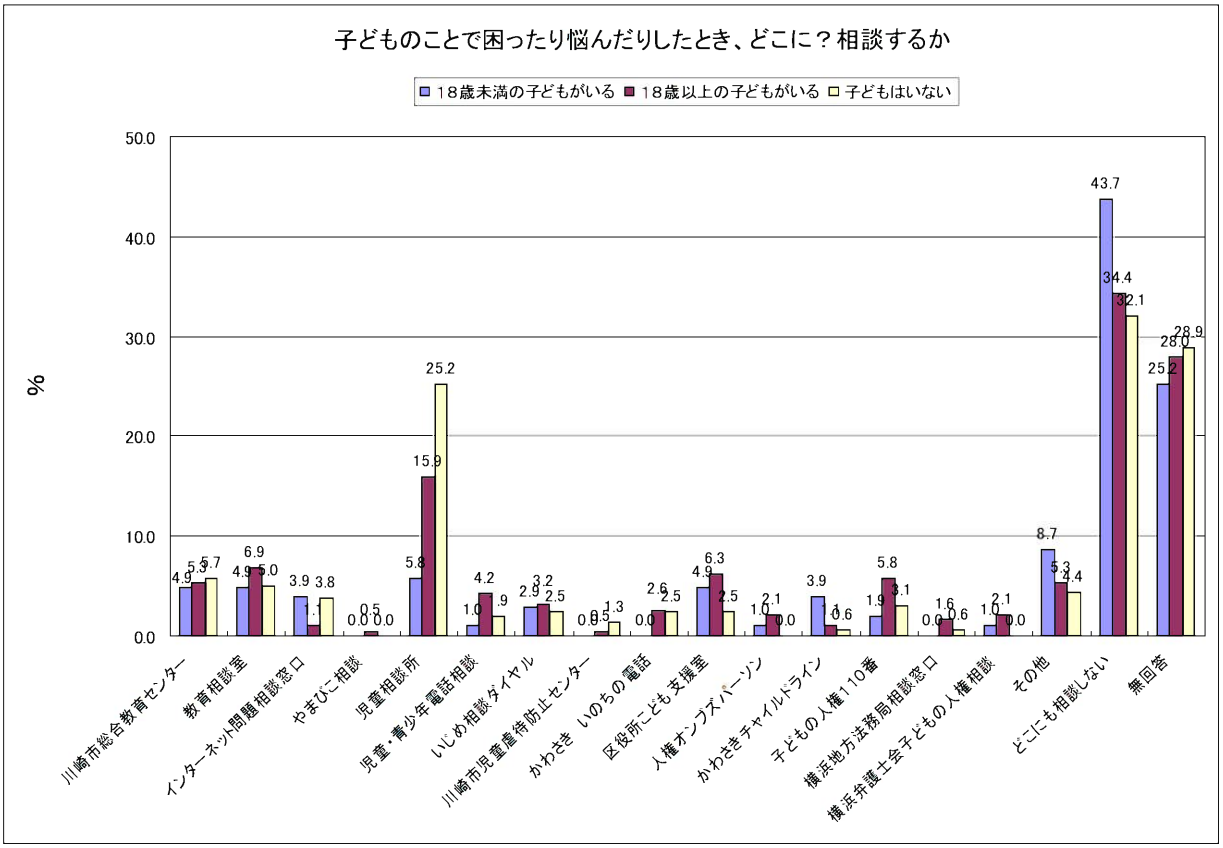


図６６　【おとな―子どもの有無別】

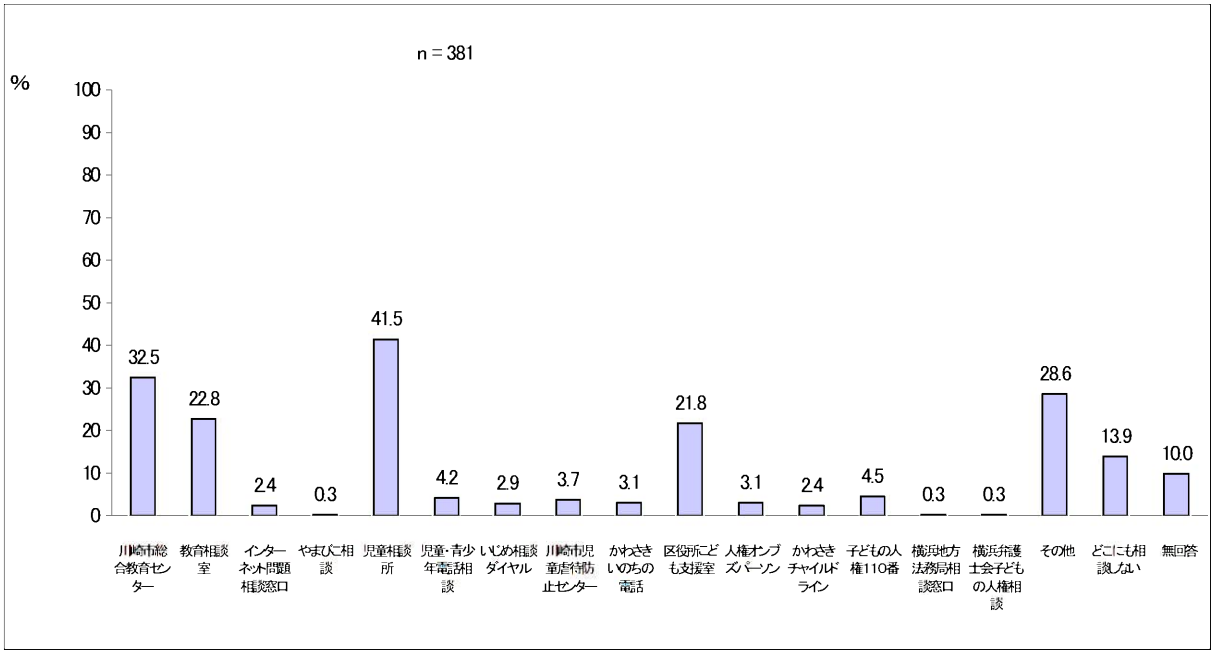


【職員】）

利用しようと思う相談機関・救済制度について職員全体としてみると、最も多い回答が「児童相談所」の 41.5%であった。次いで「川崎市総合教育センター」32.5%、「教育相談室」22.8%、「区役所こども支援室」21.8%が多かった。また、「どこにも相談しない」という回答は 13.9%であった。

Ｑ１４　あなたは、子どものことで困ったり悩んだりしたとき、どこに？相談しますか

図６７　**【職員―全体】**



【職員―学校・施設別】

ただし学校・施設別にみると、それぞれに傾向があり、学校関係の職員は「川崎市総合教育センター」(36.8%)「児童相談所」(36.0%) ともにほぼ同じ割合の回答があったが、施設関係の職員の場合は「児童相談所」をあげる回答が 52.4%と半数を超える。施設関係の職員の場合は「区役所こども支援室」をあげる回答も 40.5%と高い。また、「どこにも相談しない」という回答は、施設関係の職員が 8.7%であったのに比べ、学校関係の職員はそれよりも高く 16.6%であった。

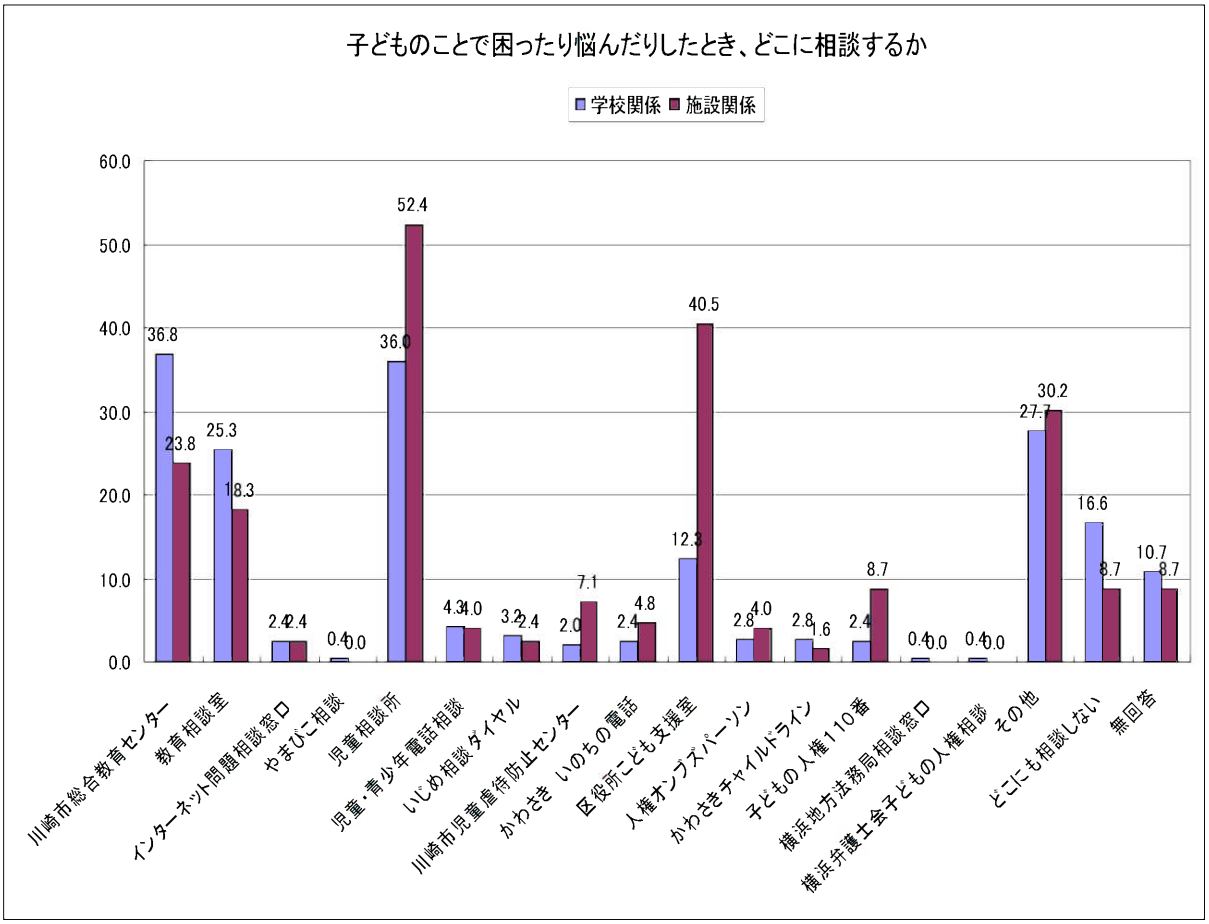



図６８